

2020年8月30日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 篠田 顕

奏楽 藍田典子

前 奏

招 詞 ローマの信徒への手紙 第12章1節

讃美歌 讃美歌21-211 (あさかぜしずかにふきて)

交 読 十戒 讃美歌21-93-3 (p. 144)

祈 禱

聖 書 マルコによる福音書 第12章28~34節
(新約聖書 p. 87)

讃美歌 讃美歌21-141 (主よ、わが助けよ)

説 教 「愛することへと動かす力」(マルコ12:28-34)

ここに「掟」という言葉が出てきます。口語訳聖書ですと「戒め」です。辞書によれば掟とは、「所属する社会や組織の中でそうするように(そうしてはいけない)と定められている

きまり」とありますし、戒めとは、「(再び同じ) 過ちを犯すことが無いように、注意する」内容のことだとあります。

そこで、まず気がつくことがあります。イエスさまが律法学者に語られた、その言葉を、そのまま、オウム返しに答えているはずの律法学者の 33 節の言葉を読むと、「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして、」とあって、イエスさまが四つ言われたのに、ここでは三つになっています。しかも「精神を尽くし」が消えて、「知恵を尽くし」という言葉が出てきます。この「知恵」というのは、イエスさまの言葉の中の「思い」というのと、だいたい同じ言葉です。申命記では三つだったのが、イエスさまのお答えでは四つになって、律法学者の言葉ではまた三つになりました。わたしたちとしては混乱させられるところですが、この四つについて細かな違いに気を留めることが必要なのではなくて、ここではとにかくも言葉を尽くして、わたしたちの心のすべてを注ぐべき愛、全存在をかけて生きるべき愛が求められているのだと理解してよいと思います。

ただそうだとすれば、そうした心から生まれる愛を掟をもって要求するというのはどういうことかということです。たとえば、わたしたちは愛することは心から生まれると理解します。心から愛する。だとすれば、心からの愛というものは、命令されて生まれてくるものなのではないでしょうか。心から愛したいと思える時にこそ、愛が生まれるのではないのか。相手が自分のことを愛してくれないからと言って、愛することを強制することはできません。言葉や力で脅しても、相手の心の中に、心からの愛を生むことはできません。強制されて、傷つけられたら困るから、愛しているふりをすることはあるかもしれませんが、それ以上のことはできないはずです。たとえ、世界一の国を作ったような権力者であっても、その力と宝のすべてを注いでも、一人の人間の心を、愛するようにと自分に向けることはできません。そういうことはわたしたちもよく知っています。だとすると、ここで愛するようにと命じられているのはどういうことなのでしょう。どうしてここでイエスさまは、愛を掟として語られるのかということです。これは、よく心に刻まな

ければならないことです。

わたしがクリスマスの時に時々使う子どものためのカテキズム（教理問答）の中にこういう問答があります。問い「神さまにかたどって造られたとはどういうことですか」、答え「わたしたちは神さまの善さ、知恵、そして愛をうつしだすために造られたという意味です」。これに続いて問いはこう尋ねています。問い「それなのに、どうしてわたしたち人間はしばしば破壊し悪を行うのですか」、答えは「わたしたちが神さまに背き、罪に陥っているからです」といいます。ここで分かることは、創世記にもあるように神さまはわたしたちを御自身にかたどって造ってくださった、ということ。それはどういうことかと言えば、心から神さまを愛する存在として造って下さったということ。本当は、生まれながら神さまが、好きで好きで仕方がない人間として造って下さった。だから、当然のこととして隣人に対して、心から自然に、イエスさまが求められたような愛に生きることができる存在であったはず。それなら、どうして愛

せないのか。それに対するここでの答えが、「わたしたちが神さまに背き、罪に陥っているからです」とはっきり言い切ります。ここで、自分の罪を見出しています。更にここでの罪とは何かという問いに対しての答えは、「神さまに心を閉ざし、神さまの律法に従わないことです」と言います。つまり、神さまに何かをした、失敗したというよりもまず先に、神さま自身に心を閉ざしているわたしたちがいるということです。だから神さまが願っておられることに従わない。それが根本的に神さまに対して罪を犯していることであり、だから、自分では自分を愛しているつもりだと言っても、神さまが願っておられるような真実の愛をもって人を愛することができなくなっているということです。神さまが求めておられる愛、イエスさまが求めておられる愛は、深く高く広い。それは、決してわたしたち人間をおとしめるためではありません。わたしたち自身が、自分のことを知っているよりも、神さまは、わたしたちをもっとすばらしい愛の存在として造ってくださったのです。

更にこのことを考えるときに、大事なことがもうひとつあります。では、このふたつの掟の中で、わたしたちが繰り返し問わなければならないこと、つまり、いったい「**自分自身を愛するように**」とはどういうことなのか、ということです。自分を愛する、自分のように隣人を愛する。ここでの最初の理解は、いくら何でも、わたしたちは自分を愛すること、自分を大切にすることを知っているという理解です。だから、これは命令する必要はない。自分を愛することは当たり前のこと。だけど、ただ、自分だけを愛しているだけではこの世の中はやっていけないから、同じように隣人にも心を配らなければならないと教えているということになる。けれど、そういうことをイエスさまは教えておられるのだろうか。ここからまた新たな問題が始まります。

たとえばこういうことを考えてみてください。わたしたちは自分に問い直します。自分自身と同じように隣人を愛する。いったい誰ができるのか。すぐにわたしたちは、他者より

も自分が大事だとしていることに気がつきます。たとえば身近なところで、自分の家族を考えてみる。兄弟と一緒に育つ。兄弟仲良くしなさいと言われても、自分の方が大事です。だから、親がとても苦勞するのは取り分ける時です。自分の子ども時代を思い起こすことで分かることがあります。わたしには一歳半、歳下の妹がいます。学年は二つ違いますが、ほとんど年子ぐらいに近い妹です。まあ、二人しかいない兄弟にもかかわらず、子どもの頃はしょっちゅう喧嘩していました。理由さえ思い出せないのですから、きつとつまらない、くだらない理由だったと思いますが、それでも思い出すのは、おやつ配分や、好きなおかずの取り合いです。自分が少しでも多いのがほしい。目を皿のようにして親の手元をじっと見ていました。7人兄弟であった父親に言わせると、お前たちは二人しかいないのに、どうしてそんなに喧嘩をするのか、というのが口癖でした。そうは言っても当の本人たちには兄弟の人数なんか関係ありません。どうしても、自分の方がちょっとでも多いほうがいい。自分と他者とを同じように愛するということは、兄弟の間

でも、夫婦の間でも下手をするとできなくなることです。そこから、もうすでに戦いが始まります。そうすると、愛について本当に悩む人は考えます。自分と他者とを同じように愛することはできないのではないか。だとすれば本当に他者を愛するためには自分を愛することを止めなければならないのではないか。自分を捨てなければいけないのではないか。自分を殺さなければいけないのではないか。自分よりも他者が大事だと考えるのが愛ではないのか。そして、世の中の知恵でもよく考えることは、もっとも尊い愛は自己犠牲の愛だ。自分も他者も同じように愛するなどとは中途半端だ。そうであれば、ここでイエスさまが言われる自分自身を愛するように、他者を愛するとはどういうことになるのだろうか。

そこでよくよく考えなければならないことがあります。いったい、そもそも自分が自分を愛して生きるということは、当たり前のこと、自明のこと、説明をするまでもなく分かり切ったことなのではないでしょうか。もしそうだとすれば、どうしてわた

私たちは自棄^{やけ}を起こすのでしょうか。どうせ自分なんか、とすぐに言うのでしょうか。一生の間、自分を受け入れ続けて生きることのできている人というのは、むしろ稀ではないのでしょうか。わたしたちは、若い時から何度でも自分が嫌になる。どうして、神さまはあの人に、あれだけの賜物を与えて、わたしにはくたさらないのかとぼやく。どうして、あの人だけが、あんなふうに幸せであって、わたしだけが、不幸なのかと思う。病気になれば怒りをもつこともあります。不公平だと言って怒ります。その不幸な自分を愛していない。そして場合によっては周りのものを脅すことだってあります。そうであれば、いったい、誰が本当に、ここで神さまが求めておられるように、自分を愛することができるのだろうか。

同じことを繰り返すつもりはありません。イエスさまはまもなく、この問答の後、十字架につけられます。愛するということの極みにまで歩いて行かれます。イエスさまがこの地上にいられてからこの時まで、長い愛の歩みを造ってこられました。

た。これは神の愛の出来事の中でのふたつの掟をめぐる対話です。イエスさまが律法学者に「あなたは、神の国から遠くない」と言われた時、きつとこの律法学者は、ただこの言葉の重みを知っただけではなくて、自分はイエスさまに愛されていると感じたはずです。主イエスというお方が、わたしを愛してくださっていると思ったに違いありません。これは愛に満ちた約束です。忘れないでいただきたいのです。愛のこもらない言葉をイエスさまが人々に語られたことは全くありません。心を注いで、思いを注いで、全力を注いで、神さまは、わたしたちを愛してくださった。だから、主イエス・キリストを与えてくださった。イエスさまは、すべての思いを注いで、わたしたちを愛してくださいました。そこでわたしは、わたし自身が自分を愛しているように、いいえそれ以上に、神さまに愛されている者だということを知るのです。そこに信仰が生まれます。

先日、他教会の方からお電話がありました。自分は洗礼を受けたのだけれど、未だにふつうに願っているような人生を

歩めていないし、人前では上手く話せない。病気のこともあるし、これでも洗礼を受けたと言えるのだろうか、そんな自分が教会にいる意味があるのだろうかと言われてました。お話を聞きながら学生の頃に教えられたことを思い出しました。宗教改革者ルターという人は、厳しい戦いを強いられて、自分の心が揺らぎ倒れそうになる時に、こういう言葉を書いたそうです。「わたしは洗礼を受けている」と。つまり、わたしは神さまに愛されているということを確認している、そのことが真実なのだということを知っている。だから、自分自身についてもう絶望はしない、神さまに生かされている戦いに絶望することはないということです。神さまを愛する思いが、消えることはないと自分自身について確信を持つことができるということです。

今日、週報の報告事項にも挙がっていますが、年長者の方に贈る言葉をお願いしています。人生の先輩、信仰の先輩に贈りたい言葉、讃美歌、聖句、イラストなどをお書きくださいとお願いしています。何を書こうかと時間がかかる方もおられ

るかもしれません。聖句と言ってもなかなかふさわしい言葉
が与えられないと悩むかもしれません。けれどわたしは何の言
葉であっても、兄弟姉妹からの言葉が皆それぞれに違っても、
半田教会という群れからの言葉である以上、聞こえてくる言葉
があるのではないかと考えています。それは、神さまから愛さ
れているあなたに告げます、神さまを愛しましょうというイエ
スさまからの呼びかけです。神さまからの愛に応じて生きる生
き方をしよう、というイエスさまからの呼び求めです。生涯を
通して、このみ言葉をもって、人を愛する根っこになっている
自分自身を愛してやまない、喜びに生きようと、イエスさまが
招いていてくださっている。すべてのみ言葉が、そこを指し示
し、そこから解き明かすことができる言葉が、これだと思いま
す。そのために神さまは、独り子のいのちを、主イエスのいの
ちを、わたしたちに与えてくださいました。神さまの大きな御
手の中で、私たち一人一人が愛の掟を聞くたびに、ただ、うな
だれるのではなくて、胸を張って、「わたしもそこに生きます」
とお答えすることができる、歩みを作っていただきたいと願い

ます。それが、わたしたちに与えられている、神のみわざを信じる道です。お祈りします。

主イエス・キリストの父なる神さま、昔から多くの人びとの心に刻まれてきた二つの掟が、わたしたちの内に新しい響きをもって聞こえ始めました。この二つの言葉がわたしたちを生かします。そのことを心から感謝いたします。どうか、わたしたちが自分自身に対する喜びの愛を持ち続けることができますよう、導いてください。そして、自分を愛するあなたの愛をもって、そこから生まれる隣人への愛に、あなたを愛に抜く心に、生き生きと生きることができるようにしてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

讚美歌 讚美歌 21-196 (主のうちにこそ)

献 金 讚美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>